疫学研究班報告

班長
曽　田　研　二

第１回班会議（昭和６３年９月２６日）において、各班員の研究計画に基づいて検討した当班の研究計画の概要は次の通りであった。

１．地理病理学的研究

１）全国のＡＴＬ患者発生状況の把握・・・・・・・既存研究班資料の活用等

２）全国のＨＴＬＶ－１キャリアーの実態把握・・・日赤献血検査成績、
予研血清銀行保存血清検査成績

３）妊婦のＨＴＬＶ－１抗体保有調査

４）ＡＴＬ発生頻度の高い地域におけるＨＴＬＶ－１抗体保有調査
・・・沖縄、九州、四国等

２．感染経路に関する実態調査およびリスク要因の検討

１）ＨＴＬＶ－１抗体陽性妊婦の出産児の長期追跡調査

２）一般キャリアーの家系調査と感染経路調査

３．感染者、発病者の数の将来推計　・・・・自然推移、母乳遮断の影響の検討

４．ＡＴＬに関する疫学情報の収集・解析と疫学モデルの作成

これらの研究の実施について次のように問題点の取り扱いを決めた。

１．全国的な抗体保有率の地理的分布成績は、原則として都道府県内の広域地域とし、市町村レベルでの公表は行わない。

２．抗体検査法に関してはＰＡ法、ＥＬＩＳＡ法ともにメーカーの協力を得て同一ロットの試薬を使用する。

３．キャリアーの疫学調査においては調査項目、調査票を共通にすることが望ましい。

この研究において必須の抗体検査については、フジレビオ社とエーザイ社の協力により、特定同一ロットの試薬を使用することが可能となり、中央にて一括入手、配布を行った。

以上のことに基づいて、各自分担課題を決め研究に着手しているが、昭和６３年度総会（平成元年２月１６，１７日）において、各班員の現在までの研究概況が報告された。その多くは各々の従来の研究を発展、継続させたものである。血清疫学調査については、現段階ではレトロスペクティブなものが多く、今後行われる追跡調査、地域調査の結果とあいまって、ＡＴＬ感染の実態が明らかになることが期待される。

総会における報告・討議の主な問題点を総括すると次の通りである。

１．全国のＨＴＬＶ－１キャリアーの分布状況について

全国各広域血液センター（７施設）の献血者のＡＴＬＡ抗体検査成績から成人各年齢層の性別、地域別陽性率の概要が明らかとなった。ＩＦ法では九州地方に高率の傾向が認められるが、ＰＡ法では低力価の陽性率に地域差が認められず、この群の解析が重要と考えられる。全国のキャリアー分布解明の他のアプローチとして、予研血清銀行の保存血清の利用の可能性が検討された。献血よりも若年を主として幅広い年齢層にわたり、約１５年前に遡行できることは、この手法の利点である。しかしこの程度の期間で、普遍暴露性のないこの種のウイルスの時・空間的分布の調査に果たして有効であるかの議論があったが、今後の有力な情報源と期待される。

２．一般住民および妊婦のＨＴＬＶ－１抗体保有状況について

地域的な一般住民および妊婦のＨＴＬＶ－１抗体保有状況については、岩手県、横浜、愛媛県、対馬、鹿児島県、沖縄県等の状況が報告され、国内の広域地域差のみでなく、各県内における著しい地域差の存在が明示された。

３．母子感染の頻度と長期追跡調査

母子感染の頻度と長期追跡調査についても横浜、対馬、愛媛、鹿児島、沖縄の成績が示され、母乳哺育のリスクなどが検討されたが、今後さらに全研究班としての "case follow up study" の必要性が要望されるところである。